
冥土喫茶へ いらっしゃ~い!

高遠響

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冥土喫茶へ いらっしや〜い！

【Nコード】

N1371BA

【作者名】

高遠響

【あらすじ】

ここは大阪、猫間川商店街。喫茶サニーサイドの常連客は静子バアサンと笑子バアサン。ある日店主が体調不良で入院することになり、この二人のバアサン達がサニーサイドを預かる事に……。

嗚呼、げに恐ろしきは「大阪のオバハン」が進化した「大阪のバアサン」。

濃〜い大阪の笑いと人情をご賞味あれ。

年寄りの朝は早い。というか、今時の小学生よりも早い時間に布団に入るものだから、当然目が覚めるのも早いのだ。八時前にベッドに潜り込んでテレビを眺めながら寝てしまうとして、そこから八時間寝たとしても朝の四時にはお目覚めだ。そこからもう一度寝直そうと思ったところで、若い頃と違って仕事でくたくたになっている訳でもなく、毎日嫌というほど睡眠時間を取っているものだから、それ以上連続で眠りにつけるはずがないのである。

「だからね、あなたの悩みは悩みやないの」

静子は訳知り顔で厳かにそう言い放ち、コーヒーを一口飲むと、目の前でしょぼくれている幼馴染の笑子の顔を見た。彼女の不眠の悩みはもう数えきれないくらいに聞いていて、耳に出来た夕口は既に海坊主サイズのオオダコに成長している。だが、しわに埋もれそうになっている目をしょぼしょぼと瞬かせているのを見ているとやっぱり可哀そうに思えてくるところが自分でも不思議だ。まあ、こいらで少し弁護をしておいてやらなくてはなるまい。静子はうんうんとうなずいて見せた。

「まあな、あなたは昔っから神経質やさかい。しょうもない事をくどくど考えてるから余計に寝られへんねんな」

「しょうもないで、えらい言われようやな……」

先ほどから静子にやられっぱなしの笑子はますますしょぼくれて目の前のコーヒーカーップに入れっぱなしになっているスプーンを指先でいじくった。ただでさえ丸い背中がますます丸く小さくなる。

静子は自分のコーヒーを指さしながら言った。

「そんなん言うてるくせに毎日ここに来て、コーヒーなんか飲んでるからますます寝られへんねん。せやけど、このコーヒー、薄いで。水臭いコーヒーや。あ、コーヒー臭い水か？ このコーヒーで寝られへんというのはありえへんやろ。なあ、厳ちゃん」

カウンターの中で新聞を読んでいたマスターの蔵ちゃんは渋い顔で静子を見た。

「姉ちゃん、他の客の前でそんな事言わんといてや。なんも混ぜてへんで。それに姉ちゃんら、いつもアメリカンやから水臭いねん。たまにはエスプレッソでも入れたるか」

静子はがははと笑いだした。

「そんな訳のわからん横文字のコーヒー飲んだら口腫れるわ」

蔵ちゃんは「訳のわからんのはあんたやがな」と口の中で呟きながら新聞に再び目を落とす。

「ああ、それにしても、なんやしんどいわ……」

笑子はふうつとため息をついた。

ここは猫間川商店街の端っこにある喫茶店サニーサイドである。

猫間川商店街は大阪の下町に戦前からある古い商店街で、戦災を間抜け、奇跡的に平成の世までその姿を残していた。昭和の五十年代までは活気あふれる下町の空気に満ち溢れていたが、バブル期にさしかかると周辺地域の再開発が進み、だんだん客足が遠のいていった。そして、平成のご時世になるとその店舗数は昭和の時代からは比べ物にならないくらいに激減していて、数える程になっている。いわゆるシャッター通りというヤツだ。暗いアーケードの通りを覗きこむと、ぼつんぼつんと灯りが見える。そういう店はたいがい他所に別の店舗を構えていて、元の店を倉庫代わりに使っているか、隠居した年寄りが長年の習慣でとりあえず店を開けているというよな店ばかりだった。

そんな中でこの喫茶店サニーサイドは稀有な存在だ。商店街の一番入口に構えているため、表の通りを歩く客を呼び込む事に成功していた。そのお陰で開店から十年になるがなんとか潰れることなく回っている。

そのサニーサイドで毎日「水臭い」コーヒー一杯で何時間も粘るこの二人の常連客、静子と笑子はこの近所に住む後期高齢者、平た

く言えば、おばあちゃん達だ。猫間川商店街も古いが、この二人も大概古い。そして生まれも育ちも猫間川商店街の近所という極め付けだ。

真つ白になつた髪を孫に選んでもらつたカチューシャでまとめている、やたら元気な老婦人が静子だ。名前とは正反対に、威勢が良くてあつけらかんとした物言いは周りの人間を閉口させるのに十分だった。何を言つても堪えないおばあちゃんに静子の息子夫婦や孫達はさんざん振り回されているらしい。本人は全く自覚がないのだが、少々おせっかいで、あちらこちらに顔を突っ込んでほとんどもない事をやらかすのだ。よく言えば、責任感と面倒見がいいという事なのだが、悪く言えば「おせっかいのいつちよかみ（なんにでも顔を突っ込んでくるという大阪弁）」だ。孫達からは密かに「ナンギーズの四番バッター」などという称号を頂戴している。もつとも本人はどこ吹く風で、週一回通つているいきいきサロンという高齢者のコミュニティでは自称「超がつくほどの人気者」などのたまっている。どこまで本当だがよくわからないが、全く人見知りしない大らかな、悪く言えば図々しく厚かましい性格は人好きするに違いない。身体の方と言うと、これまたすこぶる元気なようで、少々足元がふらつく事はあるが、気がつけばその辺をうるついている。近所でも評判の名物ばあちゃんだ。

もつとも頭の中身はと言うと八十五歳という歳に相応して、物忘れがひどくなつてきているらしい。本人も自覚は十分にあるらしいのだが、すぐに

「あゝ、最近うちもボケてしもて。いやあ、そんな事あつたかいな。そんなもん、さつき食べたモンも忘れてまっせ」

などと逆手に取つて周囲を煙に巻いてしまおうとする。まさしく「ナンギーズの四番バッター」にふさわしい。

一方の笑子は静子の幼馴染で、やはりこの界限に長く住んでいる。もつとも結婚して夫の転勤で一度は大阪を離れたのだが、三十年ほど前に未亡人になつたのを機に舞い戻ってきた。五年前から戻つ

て来た娘と一緒に住んでいる。

笑子はこれまた名前とは正反対で、地味で控え目な、ついでに言うならば神経質で心配性のため、いつも眉間に縦皺が寄っているよくなおばあちゃんだ。小柄で細い体はちよつと強い風が吹けば飛んでいくのではないかと思われそうなくらいに頼りない。あつちが痛い、こつちが痛いと言っては毎日近くの整骨院に行つて電気を当て、その後サニーサイドに寄つて静子とたらだら喋つて過ごすという生活パターンだ。

若い頃から何かにつけポロポロと病気を重ねてきたためか、自分では虚弱体質だと思ひ込んでいる。もつとも本当に虚弱体質でよれよれなら、八十五歳までも生き永らえるという事もなさそうなものだ。その証拠に整骨院の先生からは、年相応の体の不具合はあるもの、すぐさまアチラに行くような緊急性の高い病は持っていないと断言されている。

「歳やからな、そら、あつちも痛いしこつちも痛い。明日死んでもしゃあないわ。せやけど、ちよつと動いたらこころへんがきゅくと痛うなつて。ちよつと動くとドキドキするやる？　これがまたつらいんや。なんで治らんのやるなあ。ああ、きつともうじきお迎えが来るわ……」

と、情けなさそうに言うのが口癖だ。あきらめているのかそうでないのか、悟っているのかいないのか、よくわからない揺れるお年頃なのである。

そんな二人が毎日のようにサニーサイドに立ち寄つては、毎日のように同じ会話をくりかえすのだから、一番かわいそうなのはそれを毎日のように聞かされ、そして大した売上にもつながらないサニーサイドのマスター、厳ちゃんだろう。

厳ちゃんは静子の弟で、静子より十五歳年下の七十歳だ。老年と呼ばれるところに足を突っ込んでいるものの、白髪の交じつた髪を後ろでちょんとくくり、赤いチエックのカジュアルなシャツとジーンズというアメリカンな格好が似合う男性だ。昔は和菓子職人だっ

だが、実は和風よりアメリカンにずっと憧れていた。サニーサイドは敵ちゃんが長年抱いてきたアメリカンドリームが満ち溢れていて、落ち着いた雰囲気ながらも、アーリーアメリカンのインテリアや古びたジュークボックスが置かれてあり、BGMにはいつもオールデイズが流れている。

姉弟とは言いながら、静子は敵ちゃんの親代わりと言ってもいい。忙しい両親に代わって赤ちゃんの頃の敵ちゃんの世話をしたのは静子なのだ。おかげでお互いに老人と呼ばれるような歳になっているにも関わらず、敵ちゃんは静子に頭が上がらないと来ている。

ちなみに二人の実家は饅頭屋で、後を継いでいた敵ちゃんが十年前に一大決心をして廃業し喫茶店サニーサイドを作ったのだ。その時も静子が結構な金額の援助をしたという経緯があり、敵ちゃんは結局いつになっても姉ちゃんに頭が上がらない。そんなこんなで、静子の格好の暇つぶしの場とされても文句も言えないのだ。

アーリーアメリカンとはまるで縁のなさそうな二人のおばあちゃんはランチの直前までサニーサイドの特等席を乗っ取って時間をつぶし、用事のない日は昼からもやってきてまた朝と同じような話をしながら時間をつぶすというのが、ここ十年の日課となっていた。特等席である窓際の席は、この二人にとっては甲子園の年間予約シートのようなものだろう。

「そう言えば、敵ちゃん」

笑子がカウンターの中へと目をやった。敵ちゃんは不景気な顔で新聞を読みふけている。この時間帯は大概この二人の後期高齢者以外に客がいないことが多い。不景気な顔にもなるというものだ。「あんたも体調悪いって言うてたんちゃうの。病院は行ったんかいな」

「あ？ ああ、明日朝から行ってくるよ」

敵ちゃんは新聞を畳んでカウンターの下に置いた。

「ほんなら明日は休業か？」

静子と笑子は顔を見合わせた。二人にとっては大問題だ。

「明日は明恵に頼んであるから」

明恵とは敵ちゃんの嫁である。普段はモーニングとランチの時間帯に調理を手伝いに来る。が、普段から無口で無表情なのでカウンターの中にも存在感はほとんどない。たまに口を聞いても取りつくしまもないというくらいにぶっきらぼうなので、明恵がいたからと言って会話が弾むこともなければ、場が明るくなるということもない。そもそもあまり接客は好きでないらしい。

「そうかあ。明恵はんか……」

静子が声を潜めた。

「うちの事、うるさそうにしよるからなあ。長居はでけへんで」

「なんやて？」

耳が遠くなってきたている笑子が聞き返す。

「明恵はすぐにわてらの事をうるさそうにしよるから、長居はでけへんなあ！」

静子はでかい声で言い直した。せつかく声を潜めて言った意味がない。敵ちゃんは顔をしかめた。うちの嫁やのうても、このばあさん達相手につるさそうにしない人はおらんやろ……。心の中で呟きながらも、静子には言えないところが悲しい敵ちゃんなのであった。

> 続く <

メイド・デビュー！ ―（後書き）

この物語の登場人物・登場する場所は架空のものです。猫間川はかつて実在した川ですが、現在は埋め立てられ地図上には存在していません。

翌日静子がいつもの時間にサニーサイドにやってくると、カウンターの中には明恵がいた。ずんぐりした体に地味な茶色いエプロンをかけ、いつものように仏頂面でモーニングのサラダを作っている。

「おはようさん」

静子がにぎやかに入ると、明恵は無愛想に「いらっしやいませ」と呟き、入ってきたのが静子であるとわかるとますます無愛想な顔をした。まるで挨拶をして損したとでも言いたげな雰囲気だ。

明恵の代わりにモーニングを食べていた常連客の若い男性が返事を返す。

「ばあちゃん、おはようさん。相変わらず元気やなあ」

「あれ、宮さんとの。久しぶりやないの。今日はえらいのんびりやな」

「今日は定休日やねん。朝寝坊や」

「早いこと朝ごはん作ってくれる嫁もらいや」

「大きなお世話や。そんなん言うなら、紹介してや」

静子のはがはと笑いながらいつもの席に座る。

「あかんあかん。うちの知っているのは皆もう姥桜おばざくら、いやいや通りこしてドライフラワーになっとるわ」

「いくらなんでもばあちゃんの友達はいらんわ。ばあちゃんの孫の友達くらいやつたら嬉しいなあ」

「ど厚かましい。そんなん自分で探さなあかんで。こんなところで油売ってんと、どこぞ行って可愛いネエチャンつかまえといで。……」

あ、油売ってるんとちゃうな、朝ご飯買ってくれたはるんやったわ。毎度おおきに」

ポップコーンか煎り豆か。一気にまくしたてると、息継ぎもせずカウンターへと声をかける。

「明恵はん、ホットのアメリカン」

静子の注文に明恵は無言で食器棚から白いコーヒーカップを出してきた。カップとソーサーが触れる固い音がやたら耳につく。それだけでも充分に威圧的だ。

「……相変わらずやなあ。こんなんで一日大丈夫かいな」

静子は眉をひそめる。接客などと言うものは笑顔が第一である。ましてここは大阪だ。笑顔と愛想と、愚にもつかない世間話が商売成功の秘訣の一つなのだ。

「これはほつとかれへんなあ……」

静子は腕組みをして一人うなづく。どうやら今日一日この場に留まって接客のサポートをしてあげようという、余計なおせっかいを思いついたようだ。

しばらくすると笑子がいつものようによたよたと現れた。

「おはようさん……」

小さい声であいさつをしながら入ってくると、カウンターの明恵はちらつと視線を投げてよこしただけだった。静子は思わず唇をへの字にゆがめ、笑子に目配せした。

「なんや、やつぱり今日は敷居が高いな」

笑子は相棒の前に座ると声を潜めて囁く。

「せや。なんであんなに無愛想なんやろな。損や」

静子はしかめっ面をした。しゃべりの静子にはこれほど無口で無愛想な明恵が全く理解できないのだ。もっと理解できないのは敵ちゃんと明恵が見合いではなく大恋愛の末に結婚したという事実である。敵ちゃんとは高校の先輩後輩の仲だったらしいから十五、六歳からの長い付き合いだ。なんやかんやと言いながら、もう五年もすれば金婚式というのだからまったくもって理解できない。

「そらなあ、確かに蓼食う虫も好き好きとは言っけどなあ……」

静子は失礼千万な事を呟いた。

「アンタいらん事言いなや」

笑子にたしなめられ、静子はちょっと肩をすくめた。

午前中の客はぼつぼつと、しかしながら入れ替わり立ち替わりで

途切れることはない。しかし、どの客も扉を開けてカウンターの明恵を見ると一様に「ありゃあ……」という顔をする。そして注文のモーニングを平らげるとそそくさと帰っていくのだ。

「これはますます問題やなあ」

静子は客の反応を観察しながら渋い顔になった。

「明恵はん、最近ますます無愛想になつたんとちゃうか？」

笑子までが身を乗り出して客の反応チェックを始めた。

当の明恵は時々二人に目をやって、ぴくぴくと頬をひきつらせている。「まだおるんかい。はよ、帰ったらええのに」とでも言ったところだろう。もつとも口うるさい小姑二人に居座られては明恵でなくとも無愛想になろうと言うものだ。

居心地の悪い空気の中、サニーサイドの午前中が過ぎていった。

昼のランチタイムが過ぎて店が落ち着いた頃、蔵ちゃんが帰ってきた。

「おかえり」

明恵が無表情に、しかし素早く声をかけた。客に対する声掛けよりも夫に対する声掛けのスピードの方が早いというのがなんとも妙な具合だ。

「おかえり、どないやった？」

カウンターに座っていた静子もすかさず声をかける。

蔵ちゃんは静子に目をやると、ぼそつと呟いた。

「なんや、姉ちゃん、まだおつたんか」

「家で昼ごはん食べてからまた来はりました」

明恵が仏頂面で答える。

「なんや、それ。どうせやったらランチ食べたらエエのに。たまにはアメリカンコーヒーより高いモン注文せえよ」

蔵ちゃんは元気のない声でぶつぶつ言いながらカウンターの椅子に腰かけた。

「顔見るなりエライ言われようやがな。コーヒー一杯でもお客さんやで。だいたいこのランチは量多い。よう食べきらんねん。年寄

り向けの量にしてくれたら食べるわ。お代も年寄り料金やで。老人パス利用可でもエエな。……で、なんや、その手は」

しゃべりまくる静子を巖ちゃんは手で制していた。

「悪いけどな、今そんなしょうもない話してる気分ちゃうねん」

そしてどよよんと澀んだ表情で明恵を見上げた。明恵は眉をひそめた。

「悪かったん？」

「せや……。バリウム飲んで写真撮ったんはええんやけどな、なんか出来てるらしいわ」

「……癌か？」

「いや、取って、培養検査してみなわからんて。どっちにしても入院や……」

明恵が石のように固まる。巖ちゃんはすっかりしょぼくれてがっくり肩を落としている。よほどショックだったのだろう。一気に十歳ほど老けこんだように見えた。

「いつ入院するん」

明恵はへこんでいる夫を覗き込んだ。

「来月」

「二週間もあるやんか。大丈夫なんか。そんなにほつといて」

「しゃあないがな。病院のスケジュールやねんから」

巖ちゃんは暗い顔で答え、明恵はますます固い表情になった。まるで明日にでも死ぬような重苦しさである。静子のため息をついた。

「あのなあ、巖ちゃん。今からそんな深刻な顔してどないすんねん」

静子は腕を組んで大声で喝を入れる。

「あんたかて七十や。あちこちガタも来て当たり前や。うちかて七十くらいからあっちもこっちも具合悪いけど、生きとる」

巖ちゃんは恨めしそうに静子を見る。

「さつさと取るモン取っておいでや。よう考えてみい、仮に悪いデキモンやとしても、年寄りはあるまり悪くならへんらしいやんか。

若いモンと違つて病気も元氣ないねん。ほれ、しつかりせんかいな、

情けない」

「……姉ちゃんはホンマに能天気やなあ。うらやましいわ」

「あかんちゃんは思わず苦笑いした。」

「そらまあ、そうやな。とにかく入院の準備もせなあかんし、店の事、明恵に頼みたいんやけど」

「そんなん困るわ」

明恵は間髪を入れずに拒否した。

「私が毎日一人で店の事をできるはずないやろ。調理はともかく接客は苦手や。わかってるやろ」

無口な明恵にしては長いセリフだった。よっぽど嫌なのだろう。

「せやけど、ずつつと閉める訳にもいかんし」

「あかんちゃんは渋い顔になった。もちろん明恵が接客を苦手としているのはわかっている。しかし、この店は地元の常連客で持っていると言ってもいい。これから先、入院して手術して、また入院して、通院して……などと言つとぎれとぎれの営業では常連客も離れてしまう。」

「なあ、明恵。頼むわ」

「あかん」

「なあて……」

「あかんもんはあかん」

明恵は頑として首を縦にふらない。何度か同じやりとりとしていたが、どうも埒があかない。だんだんあかんの声が険しくなってきた。

「こんなに頼んでんのにあかんのか？　なんでやねん！」

「うちがずつと接客なんかしたら、ほつといても客は離れるわ」

突き放すような言い方だ。

「なんでそんな事！」

滅多に怒らないあかんの顔が赤く染まる。明恵はついつと身をひるがえし、流しに向かい無言で皿を洗い始めた。

険悪な空気。それとは対照的なカントリー調のBGMが空々しく

流れる。

「やれやれ……」

静子が顔をしかめた。

「ほんまにどないもじゃあないな、あんたらは。ほんなら明恵はんがまかないをすればエエ。客の相手はうちがしたる」

「はあ？」

蔵ちゃんの口がぼかんと開き、流しでは明恵が持っていた皿を一枚落つことした。

「うちはまかないはようせんけど、客相手は大丈夫や。なんせ若い頃は饅頭屋の看板娘やったんやからな。あんたは知らんやろけど、うち目当ての客も多かつたんやで」

えへんと胸を張る。

「あ、あのなあ、姉ちゃん。気持ちはありがたいけど」

「なんや？ 不服か？ ここの常連客のおおかたは知ってるで。皆うちにはよう声かけてくれるしな。蔵ちゃんよりもうちの方がよう喋ってるわ」

「そらまあ、そうやけど……」

お化け屋敷やと思われるで……という言葉を蔵ちゃんは必死で飲み込んだ。そんな事を言おうものならえらい事である。持っている杖で殴られそうだ。

「姉ちゃんかて歳やから。毎日ここで仕事なんて、なあ。体力が持たんやろ」

「何言つてんねん。失礼な」

静子は憤懣ふんまんやるかたなしといった表情でどんっとカウンターをたたいた。

「毎日一時間は歩いてるし、階段かて平氣の平左衛門や。こないだはいいききサロンで江州音頭しゅうおんど踊つてんで！ 知ってるか？ いいききサロンでリポビリもしててな、リポビリの先生に『静子さんの体力は六十、いや、五十代や』って誉められたんやで」

「……それを言うならリハビリやろ」

蔵ちゃんはくらくらしながら突っ込む。

確かに静子の体力はすさまじく自分の興味のためなら平気で一日出歩いているし、喋りのうまさはさすがに若い頃店先で鍛えただけの事はあるとは思っている。たまたま腰痛がひどくなった時期に申請した介護保険でさえ認定がされなかった。もつとも知人親戚一同は「この人が認定されたら、詐欺やと思われるやろ」と納得していたが。件の腰痛も何度か整骨院に通っただけで治ってしまった。元氣すぎて、不死身ではないかと思うくらいだ。しかしながら、この世界に八十五歳のばあさんをあえてウエイトレスに雇う店があるうか。

「あんた、うちの事ババアやから嫌なんやろ」

凶星である。

「失礼やな。酒かて古い方が値段高いやろが。女かて古い方が味わいがあるつちゆうもんや」

「……それは違うような気もするけどな」

蔵ちゃんは頭を抱えた。どうすればこのじゃじゃ馬ばあさんをお願いとどまらせる事が出来るのだろうか。

「お姉さん」

黙って洗い物をしていた明恵が振り向いた。

「お願いしますわ。その方が私も助かるし」

「あゝきゝえゝ」

蔵ちゃんが卒倒しそうな顔で妻を見つめた。

「せやけどお姉さんだけやったら万一なんかあったら困るし、茜ちゃんに手伝ってもらわれへんやろか」

茜とは静子が同居している息子夫婦の長女、つまり静子の孫だ。

この春から大学二年生である。

「短い時間だけでもエエから。茜ちゃんとお姉さんと交代で入ってもらったらエエんとちゃう？」

静子は横目で明恵を見た。万一なんかあったら困るて、それはどいう事や。ここで倒れて死んだら困るってことか？ と心の中で

眩く。

「そ、そやな。茜ちゃんやったら若いし、別嬪やし。手伝つてもろうたらこちらも大助かりや」

蔵ちゃんの顔がぱっと明るくなった。

「今夜直接茜ちゃんに頼みに行くわ。姉ちゃん、ちらつと言つていてくれよ」

静子は少々ご不満である。高齢であるというだけで全く信頼されないというのは侮辱だ。しかし孫の茜が手伝うとなれば心強いことには違いない。それに茜はいわゆる「ばあちゃんっ子」で静子にとつては一番気の合う孫なのである。茜であれば自分も文句はない。

「よっしゃ。言つといたるわ」

静子は重々しくうなずいた。

> 続く <

蔵ちゃんが入院した日のランチタイム。

サニーサイドのカウンターには相変わらず仏頂面の明恵と、白いレースのついたエプロンを着た、スラリとした若い娘が入っていた。健康的な小麦色の肌に、ぱっちりした愛らしい目。陽気なオーラを身にまとったその娘は静子の孫、茜である。

ランチタイムの常連客は茜を見ると嬉しそうに声を上げた。

「お、蔵ちゃんから聞いてたけど、噂以上の別嬪さんや」

「いらつしやいませ！ 蔵ちゃんじゃなかった、マスターみたいに上手くでけへんけど、よろしくお願いしますう！」

茜は輝くような笑みを浮かべて、カウンター席についた常連客にお冷を出した。

「おつしゃ、おつしゃ。何でも聞いてや。おっちゃんは別嬪さんには優しいでえ。なあ、明恵さん」

「道理でうちにはキツイはずやな」

明恵の低い声。

「え、いや、そんな、そんな事ないでえ。なあ、ネエチャン」

常連客はおたおたしながら茜に救いを求めた。茜も冷や汗をかきながらごまかし笑うしかない。

「ご、ご注文はお、お決まりですか？」

「お、おお、いつものひ、日替わりランチにするわ」

「おばちゃん、日替わりランチ一つ！」

「でかい声で言わんでも、聞こえてるわ」

明恵の呟きはメガトンパンチ級の威力である。常連客も茜も震えあがった。

と、その時、入り口の扉が開いた。

「おはようさん。ってもうじき昼やな」

静子の声である。

「おおおお！ ばあさん待ってたで！」

救いの主の登場に、常連客の声がぱつと明るくなった。が、次の瞬間、ひきつったような悲鳴に変わる。

「おいおいおい、ちよつとばあさん！！！」

常連客の素っ頓狂な声に思わず振り向いた茜と明恵は目が点になつて凍りついた。茜の手から銀のトレイが落つこちて、派手な音を立てる。

「お、おばあちゃん？」

「どや？ 女給さんにふさわしいやろ？」

そこにはどこで買ったのか、フリフリのワンピースに白いエプロン、ご丁寧なピンクのカチューシャを白い頭に乗せた静子が立っていた。何やら化粧もいつもより濃い目に見える。

「ほんまは白いカチューシャにしたかつたんやけどな、頭が真っ白やろ？ 白やつたら目立てへんからピンクのんや。このフリフリワンピース、ええやろ。一回こういうの着てみたかつてん」

「お・ば・あ・ちゃん？」

茜がようよう言葉を振り絞る。

「自分でも意外なくらい、よう似合うからびつくりや。最近の喫茶店の女給のねえちゃんはこのうカツコしてるんやろ？ そう言えば、うちらが若い頃、カフェの女給さんがこんなカツコしとったわ。……あの頃は、カフェの女給さんなんて言うたら体裁悪かつたけど、今なら平気や。ほんまの事言うとな、あの女給さんのカツコ、憧れとつてん。せやかて、かいらし（注釈・可愛らしい）やんか？」

静子は例によって例のごとくのマシンガントークで喋り倒しながらカウンター席に座る。

「ああ、喋り疲れた。茜、お冷」

「あ、はい」

茜は慌てて落とした盆を拾うとお冷の用意をした。

「……………ばあさん？」

カウンター席の常連客がしげしげと静子の姿を足の先から頭の先

まで眺める。まるで珍しい爬虫類でも見るような視線だ。

「もしかしてとは思うけど、メイドさんの真似か？」

「せやせや、今は女給さんて言わへんのやな。メイドさん言うんか。日本橋の辺り行ったらあるんやろ？ 女給さん……やのうて、メイドさんが仰山おる喫茶店」

「ばあさん、なんでそんなモン知ってるんや？」

「あなた、年寄りを莫迦にしたらアカンで。人間死ぬまで興味を失ったらアカンのや」

静子は胸を張った。

「おばあちゃん、メイド喫茶もだいぶ下火やねんで」

茜が苦笑いする。年寄りの頭の中身のアップデートは世間の流れとはだいぶ時間差があるようだ。それでもメイド喫茶を知っているというだけでも上等なのだろう。

それにしても得意そうに威張る静子の様子はただ事ではなかった。

常連客は必死で笑いをこらえていたが、ついにこらえきれず噴き出した。そして椅子から転げ落ちそうになりながら笑いこける。

「なんや、失礼な」

「ばあさんよ！ その頭のピンクのヤツ、三角の白い布に変えた方がええんとちゃうか」

「……なんや、三角の白い布で……。仏さんの頭につけるヤツかいな。あほ！ なんちゆうことぬかすんや」

「せやかて、ばあさん！ あなたがここでメイドやってたら、メイド喫茶やないで！ どう考えても冥土喫茶や！！」

静子も茜も明恵も一旦停止状態に陥った。

メイド喫茶……メイド……めいど……冥土？

三人の頭の中で漢字変換が実行されるのに数秒かかった。次の瞬間に茜と明恵がぷぷつと吹き出した。

「冥土喫茶！ おっちゃん、座布団一枚や！ 明恵おばちゃん、座

布団の代わりになんかサービスせなあかんで」

「ほんまやなあ」

二人はひーひー言いながら笑う。言い出しっぺの常連客などは涙を流している始末だ。

「なんや、なんや?! あんたら失礼やな、何が冥土や。人を脱衣ババみたいに言うてからに」

静子だけが一人仁王立ちになって怒っている。怒りながらも心の中では、上手い事言うわ、これは使えるでえ……などと思っているのであった。

こうして純喫茶サニーサイドは世にも珍しい冥土喫茶に変身したのである。

> 続く <

テレビ・デビュー！

「きゃ〜、この人が茜のおばあちゃん？　かわいいっっっ！」

翌日、茜が大学から帰ってきた時、友人を一人連れてきた。軽い茶色のロングヘアをふわふわなびかせ、毛虫も負けそうなボリュームたっぷりのつけまつげ。絵に描いたような今時の女子だ。割合素朴な茜とはだいぶタイプが違うが、随分と親しそうだった。静子を見るや否や、今時の女の子の常套句「かわいい」を連発する。

「なんや、茜の友達か？」

静子はお冷を茜とその友人の分を用意した。

「そう！　茜から聞いて、どうしてもおばあちゃんに会いたいと思っただんです！　いやあ、噂通りというか、噂以上にイケてるわ！」

アミアミのサンダルの靴底をパタパタ言わせながら喜ぶ。随分と大げさなりアクションだが、静子もまんざらではないようだ。最初はあきれていたが、やがてにんまりと笑みを浮かべた。

「そうか？　イケてるか？」

「うんうん！　イケてるイケてる！」

「そら、おおきに」

二人で顔を見合わせてイヒヒと笑う。

「好きなトコに座ってんか。まあゆっくりしていきよし」

静子はすっかり機嫌を良くしてカウンターの方へと戻って行った。

「ちよつとお、奈々子〜。あんまり焚きつけんといてよお」

茜は苦笑いしながら友人の肩をつついた。

「ええやん、ええやん。うちのおばあなんかさ〜」

奈々子は声を潜める。

「もう、な〜。論外やで。ポッケポッケにポけてしまつてさ」

あからさまな言い方に茜は慌てて静子を見た。静子はカウンターの傍でおしぼりとお冷の用意をしている。

「またこれがさ、ママも見る気全くなしっっっ！　しょうがないと

思うけど。だってさ〜、うちのおばあ、性格悪いもん。ママとも仲悪かったし。あれで介護してくれって言う方が無茶やと思うけど」「……で、どうしたん？」

「さつさと老人ホームに放り込まれた。こないだ久しぶりに会いに行っただけど、アレはあかんわ」

「きびし〜。奈々子、一応社会福祉学科やる？ もう少しお口にフィルターはかからないのですかね」

茜は顔をしかめて首を振った。奈々子はアツケラカンとしている。「でもな〜、やっぱり可愛く歳取らなあかんと思うわあ。可愛げないと誰も見てくれへんで。おばあちゃんには悪いけど、ちよっと自業自得…的なところもあるんやって。それが現実ですよ、はい」

奈々子は腕を組んで難しい顔をして見せた。そこへぬっと静子が顔を出す。

「わっ」

「あのな、あんたらな、言うておくけど」

静子は敵かな表情になる。

「どんな年寄りもな、ボケとつてボケてる訳ちゃうねんで」

奈々子はペロツと舌を出す。

「あら、聞こえてました？」

「年寄りは地獄耳でな。悪口は聞こえるねんで〜」

奈々子があははっと笑った。

「茜のおばあちゃんは大丈夫！ 全然しっかりしてるしい」

茜が顔をしかめて首をかしげる。

「しっかりしてると言えばしっかりしてるけど……。しっかりしすぎやねん。なあ、おばあちゃん」

「やかまし」

静子はじろつと孫を睨んでから、奈々子に聞いた。

「で、アンタ、注文はなんやな」

「あ、じゃあ、アイスココアをお願いします」

「はいよ、アイスココアな。アイスココア、アイスココア」

静子は口の中でココアという単語をまじないのように転がしながらカウンターへと向かった。

「きつと今しゃべりかけたら、忘れるで」

後ろで茜と奈々子がクスクス笑いながら囁きあっているのも聞こえなかった。

この調子のいい茜の友人、奈々子はあちこちで静子の事を言いふらしまわったようだ。次の日から急に若い客が増えたのである。その増え方は驚異的で、ネズミ算とはいかないまでも毎日目に見えて客数が増えていった。

「商売繁盛もええけど、これは一体どういう事やるか」

一週間して退院してきた蔵ちゃんは、客で埋まっている店内に足を踏み入れて茫然と立ちつくした。明恵はカウンターの中で必死になつて調理をしている。退院するというのは、迎えに来れないと言われて拗ねていたが、この状態ではしょうがない。

「静ちゃん、お水ちょうだい〜！」

「静ちゃん、おあいそ」

「静ちゃん、うちカレーでお願いします」

店内は静ちゃん、静ちゃんと、静子を呼ぶ声があちこちから飛び交っている。

「ああああ、もう、あんたらなあ」

店のご真ん中でメイド姿の静子が腰に両手を当てて仁王立ちになつている。

「静ちゃん静ちゃんて、静ちゃんの安売りセールとちやいまっせ！

ほんまにお冷くらい自分で入れ！ 人使い荒いなあ、もう。うちは後期高齢者だっせ！ さっき食べたモンも忘れるちゅうのに、一度に三つも四つも覚えられへんの！」

「きゃ〜、そんなストリートなところがかわいい〜」

「なにが『かわいい〜』や。そんなことは八十年前から決まってる」

静子は笑いながら手近なところに座っている若い男の子の肩をばしんと叩く。

「……無茶苦茶や」

蔵ちゃんはくらくらしできて思わず戸口に手をついた。

「あ、蔵ちゃん。帰ってきたんかいな。おかえり」

静子がようやく蔵ちゃんに気付いた。

「ただいま……って、なんやこの騒ぎは」

「なんや……って、商売繁盛しとるっちゅうことやがな。ほれ、ぼーっと電柱みたいに突っ立ってんと、さっさと厨房に入る！ 明恵はん一人では大変やねんから」

静子は蔵ちゃんをカウンターの方へと押しやった。

「はよお願いします」

明恵がぼちゃぼちゃした顔に大粒の汗を浮かべながらちらりと蔵ちゃんを見た。

「お、おう……」

「……迎えに行かれへんで、すみません」

「お、おう。この騒ぎでは、そら、無理やわな」

「はい」

二人はぼそぼそと会話を交わしながら次々に入ってくるオーダーを作っていた。

「静ちゃん、手伝いに来たで〜」

店の扉が開いて笑子がよたよたと入ってきた。

「あ、エミリーや!」

店の中の女の子がきゃぴきゃぴと喜ぶ。

「え、えみり〜?」

蔵ちゃんは持っていたコップを落としかけた。

「笑子さんが手伝ってくれたはりますねん。その間にお姉さんに『休憩しい』、言うて。それと、茜ちゃんの友達が『ポケ防止にええで』とか『ポケたらどっかに放り込まれるで』とか相当吹き込んだみたいですけど」

明恵はうんざりしたような声で呟く。

「ほんでから、また調子に乗った若い子が何を考えてか『エミリー』なんて訳のわからん仇名をつけて……。それがまたまんざらでもないらしくて……」

蔵ちゃんはあるぐりと口を開けたまま店内の歓声を欲しいままにしている二人のばあさん達を見た。笑子は確かアツチが痛い、コツチが痛いと思痴っていたはずではないか。それが足も引きずらず、杖もつかず、静子ほどの勢いではないものの店内をえっちらおっちらと歩きまわっている。

「あら怖いよ。エミリーやて。えらい仇名つけられてしもて……。こんな白髪のおバアやのに」

笑子は笑いながら手に持っていたエプロンをつけた。静子のフリリエプロンには負けるがそれでもかなり若いデザインだ。

「……いくらボケ防止や言うても、正気の沙汰やないわ。」

明恵は顔をしかめた。

「せやかて、お前が『お姉さんに手伝ってもらて』言うてんで」

「わかってますがな。せやから文句も言えせんわ。それに、ほんまにアホほど客が入ってまっさかいな」

カウンターの中で並んだ熟年夫婦は仲よく大きな溜息をついた。

> 続く <

サニーサイドの閉店時間は早い。夕方六時には早々に店を閉める準備にかかる。蔵ちゃんが一人でやっている時は、だらだらと八時過ぎまで開いている事もあったが、事実上の閉店休業状態で、客は滅多にこなかった。しかし、今や行列のできる冥土喫茶である。六時には閉めないと、次の日の仕込みやなんやかやが間に合わないのである。それに看板メイドの二人が高齢のため、これ以上働かせてぼつくり逝ってしまったたらえらいこつちゃ、という茜と明恵の配慮もあった。

「あゝ、今日も一日よう働いた」

静子は腰をとんとんと拳で叩きながら椅子に座る。笑子もエプロンを外しながら前の席に座った。

「ほんまやなあ。せやけどな、静ちゃん」

「ちよつと身を乗り出す。」

「やっぱり人間働かなあかな。ここの手伝い初めて十日経つけど、なんや調子エエねん」

「そうか？」

「そうや。家帰るやろ、夕ご飯食べるやろ、風呂入るやろ、そのままコテンって寝てしもて。氣い付いたら朝や。十日前はあんだだけ寝られへん、寝られへん言うとつたのにな」

「そらええこつちやがな。薬も飲まんとコテンって寝て、次の日氣いついたらあの世やったら理想やねんけどな」

「せや、ほんまや。ピンピンコロリっちゆうヤツや」

二人は顔を見合わせて楽しそうに笑う。カウンターの中で片づけものをしていた明恵と蔵ちゃんが顔を見合わせた。

「……デイスービスか、うちは」

「ピンピンコロリはええけど、ここでコロリだけはやめてほしいわ」
「心配せんでも、ここでは死ねへんから」

静子がカウンターの二人に声をかける。まったく地獄耳である。

「うちかて死ぬ時は畳の上がエエわ。いや、布団の中か」

そう言いながらあさん達はにぎやかに笑い転がっている。

「いや、ほんまに、冗談やのうてな。老人ホームたら言つとところで死ぬのは嫌やからなあ」

静子は顔をしかめて身震いした。笑子が身を乗り出すようにして囁く。

「老人ホームと言えばな、葉山さんトコの民三さん、亡くならはつたらしいで。静ちゃん、知ってた？」

「聞き初めやわ。そんなん、葬式の話聞かへんかったがな」

「せやんな。どっかの老人ホームで亡くならはつて、葬式は今流行りのヤツやがな、家族葬つて。近所には声掛けはらへんねんで」

「お焼香も行かれへんがな」

「せやがな。面倒臭いんやろ、家族も。香典のお返しやなんや煩わしい言うて、な」

「民三さんも寂しいなあ。商店主会でだいぶ気張つて世話役してはつたのにな」

「寂しい葬式は嫌やな。うちの主人の時は……」

二人はすっかり葬式談義に夢中になっている。蔵ちゃんは横目で二人を見ながら深いため息をついた。

「なんちゆう景気のエエ話題や。さすが冥土喫茶やな」

「ところで、いつまでこの体制でしますんや。……まさかホンマにお姉さんがアツチに行かはるまでするつもりですか」

「……いや、それは……」

蔵ちゃんはごにょごにょと言葉を濁す。退院してから三日程経つが、この壮絶なメイドさん達は一向に店を辞める気配がない。客足は上々で、この二人の効果である事は間違いないのだ。色々考えると疲れがどつと増す。年寄り二人は妙に若返つたようであるが、熟年夫婦は明らかに吸い取られている。

その時店の電話が鳴った。蔵ちゃんが受話器を取る。

「はい、サニーサイドでございます。は？ はい。あ、確かにうちですが……」

受話器を耳に当てる廠ちゃんがきょとんとしている。しばらく、はあ、はあ、と相槌を打っていたが、いきなり悲鳴にも似た大声を上げた。

「ええええ？ そ、それは、いや、駄目って事はないですけど。いえ、ご迷惑という事ありませんが……。はあ、明日。えらい急です。……いや、出来たら昼の忙しい時間は避けてもらえませんか。ほんまに洒落にならんくらい忙しいんですわ。朝か夕方なら、はい、ゆっくり話も出来るかと……。はい。わ、わかりました。お待ちします」

廠ちゃんは受話器を持ったままぺこぺこ頭を下げていたが、ゆっくりと電話を切った。

受話器を両手で押さえたまま、茫然としている。

「どないしりましたん？」

明恵が心配そうに声をかけた。

「……えらいこつちゃ。取材やて」

「取材？」

全員が首をかしげる。

「テレビの取材や、テレビの。ほれ、夜中にやってるやろ。『タウンスクープ』ってやつや」

関西圏では絶大な人気と視聴率を誇る深夜番組である。街の話題のスポットにお笑い芸人が突入して取材を練り広げるとい内容だ。台本なしのライブ感と大阪人のアドリブの面白さが売りらしい。

「そんなんあつたかいな？」

「はよ寝るよって、知らんわ」

静子と笑子は顔を見合わせて首をかしげる。廠ちゃんはおろおろと店内を歩き回る。

「明日の朝のうちに来はるそつや。ちょっと片付けて……。ああ、どないしたらエエんや……」

「ほんなら明日、うちは休みます」

明恵はエプロンを取りながらそう言った。顔が引きつっている。
「そんなテレビの取材やなんて恐ろしい。よう出ませんわ」

慌てて蔵ちゃんか明恵の腕を掴んだ。すぐるような目で懇願する。
「そんな事言わんと、おつてくれや。俺かて心細いやないか。それに取材されるのは、姉ちゃんと笑子はんや」

静子と笑子は椅子から飛び上がる。

「ええ？ うちらかいな！」

「テレビ局も物好きやなあ。こんなばあさんテレビにアップにしたら、テレビ壊れるで」

笑子が素っ頓狂な声を上げる。

「自分で言いなはん。せやけど、なんでうちらがテレビに出るんや？」

「知らんがな。大方、出入りしてる若い子がいちびってテレビ局に投書したんちゃうか。なんにしても、えらいこつちやがな……」

蔵ちゃんは静子の言葉に上の空で答えながら、おろおろと店内に視線を走らせる。

「いやあ、えらいこつちや。ほんならいつもよりも早ように出勤せんなあかんがな。もう帰って寝なあかんで。お肌が悪いよってなあ……」

静子が嬉しそうに自分のしわしわの頬を両手で包む。それを見た笑子かにやにやしなから茶化しにかかる。

「なにがお肌や。ちよつとむくんだくらいの方が、しわが無くなつてエエかもしれんで」

「ヒトの事言えた義理かいな。せやせや、茜にも教えたらな」

静子と笑子はそう言いながらそそくさと立ちあがった。随分と嬉しそうである。

「取材やて、取材。長生きしとつたら、色々あるもんやなあ。いやあ、どないしょ。どないしょ」

「エエがな。ええ冥土の土産になるわ」

嵐のような騒ぎで二人のメイドさん達が立ち去った。急にシーンとした店内に残された巖ちゃんと明恵は茫然と二人を見送るしか出来なかった。

> 続く <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1371ba/>

冥土喫茶へ いらっしゃ~い!

2012年1月10日09時45分発行